文部省維新史料編纂事務局編

維

新

史

をしてより必然に維新を回顧せしめるであらう。そして今こそ今 部に於てすら劇しく聞はれてゐる。此の、さしせまつた體驗は我々 組と古きものとの對決が日々我々の身の周りに於て、否我々の内 や我々の生活は維新以來の共を越えて、之を一の歴史的様式とす けれげ維新は決して切實に顧みられる事がないと言へる。然し今 々の中に生きて居り、我々の行動を今尚規定して居る。此の事がな に過去となり得るであらう。維新に成立した生活の様式は確に我 てあり、 々の今日の問題とはなり得ないであらう。即ち過去は現在に生き 日我々に缺除せる現在への親切なる同情と理解、將來への行動の る點に迄近付きつゝあり、此處に新に形成されつゝある生活の仕 如何なる歴史事質も其が單に過去に存在したと言ふ丈けでは我 我々の實踐を通じて其の中に働き來る限りに於てのみ眞

本書は明治四十四年維新史料編纂事務局開設以來二十七年間に

確に時宜を得たものと言へるであらう。

又成立すべきである。

正しき理論と情熱、とを與へる所の維新史が成立し得るであらう

かゝる際に於ける此の維新史の出版は

・二章)とに言及せざるを得ない。又同時に封建制度の衰類 **書及其の第一卷の體裁である。** 編)と海外勢力の東漸(第三編)も無視する事が許されぬ」として |競くには勢ひ刺幕の關係(第一編第一章) と學問の簽達 (第一編第 の顛末を没却しては明治維新の由來は說き難く(第一編)尊王論を 刊行さるゝ事となつてゐる。而して現在旣刊の第一册は「尊王論 明治四年七月に至る二十五年七箇月の事を叙するを以て目的と」 蒐集整理せられた『大日本維新史料』四千百餘册の稿本を基とし、 三編七章七百頁に亙つて整然と「委曲を記述して」ゐる。如是が本 譜・諸蒂一覽表・重臣補任表に充てる)」に編纂され、毎年一册宛 湾等諸般の說明に及」び、 「合計七册大略四千頁(内一册は年表・系 し「主として國内政局の推移を叙し併せて外交・學事・軍事・經 ・筆を孝明天皇践祚の弘化三年二月に起し、廢藩置縣の行はれた

維新」と「三たび」大なる復古的顯現を見、「就中明治維新の業最も ち大化の改新、中頃にしては建武の中與、近時にあつては明治の も「國民の心に潜在する建國の精神が 忽ち光を放つて」「上古は即 ある。誠に本書の 說く如く、 唯第一卷の證く所と、 凡例、 緒言の宣ぶる 處とを以て 全七卷を が全體を見ずして部分を說くは猶更不可能に近い。故に此の度は 以て未だ見ざる全卷を推しての事であつて、甚だ臆測の至である し、「天皇親政の宏談」は「天壤と籎まり無く」「時に顯晦あり」と雖 貫する維新更解釋の仕方を臆測批評するに止め度いと思ふので 扨て我々が次で述ぶべき批評は、現在手にし得る第一卷のみを 我朝は 萬世一系の 聖天子 上に坐ま

單なる一範例とする理解にのみ止まるならば、維鋳と不可分に結 びついてゐる所の、今日我々の生活の中で尙生きて働き、今や新 らう。さりなから、本書が果して、維新を萬世不易の建國精神の 解釋は、これ亦其れ自體に於ては誠に正しとされねばならぬであ なく完成せられた」とする所の本書を一貫する維新の王政復古的 偉大、 建國の精神を 具現して
彌×萬世不易の 範を後世に 垂れた」 本書編纂者の苦心を察する次第であるが、希はくは縫く諸卷が此 も畢竟は本書の官製編纂物たる性質の不得止致す所なるを思ひ、 しくは事物起源的な叙述を持つ事にも關はる事であらう。然し是 て此の事は本書が維新に於ける特殊多様なる事實の羅列的な、若 ける具體性を持ち得る事を亦尠くすると言ひ得るであらう。そし りでなく、直に踏み出させる所の、將來への行動の契機として生 本書の目指す「國民精神作與」をも、我々をして立ち上らせるばか やがて本書を讀む我々の現在理解をして抽象的ならしめると共に 過去として把握さるゝ事を力弱きものとするであらう。此の事は 上に持つ位置に對する具體的理解を妨げ、其が現實の裡に生ける 意義―規定力―と明治の其とを均しなみにし、後者の國史全體 のであると言へる。尚言は、此の抽象は大化、建武の現在に持つ の王政復古としての――維新の具體的なる理解の來る事うすいも 式成立の時期としての――即ち歴史的に特殊一定の意義を持つ所 に生れつゝあるものによつて退却をせまられて居る所の、生活様 皇親政の實が擧り」終に「廢藩置縣が行はれて維新の大業は剩す處 事、誠に母き極みであり、「王政復古の大號令」愛布より逐次「天

の臆測をして異なる杞憂に終らしめん事を「

もの『維新史料』を、その根底に堅く持つ事は、誠に官製編纂物の 人名歐對照表六頁、正誤表一頁、文部省內維新史料編纂事務局發 凡例二頁、目錄二五頁、結言五頁、本文六七四頁、附錄外國地名 なく出版され終る事を要心祈念するものである。(第一卷、菊版 みの持ち得る强みであらう。我々は本書が『史料』と共に、つゝが は確に大きな歡びでなければならぬ。然も此が稿本四千四百餘册 さるにても、我々が今日かゝる膨大なる『維新史』を持ち得る事 東京神田明治書院養賣、價四間八拾錢)(石田一良)

思圓上人一期形像記

行、

橋 本 胤

當今の如く外國と事を構ふるや至ると、復新に師の效験が追憶せ も文永弘安の蒙古襲來期に際曾され攘夷のために神佛に熱願を能 められた事が知らる、に及びて、師への景慕は一層熾烈となり、 て置いた事は、年と共に闡明されて行き、研究者の研究を積む毎 に、ます~~共の巨大なる足跡に驚嘆するのである。殊に師が恰 南都西大寺の寂寞が、鎌倉末期の巨匠として幾多の偉績を残

あるから、その點に於いて史料としての價値はやゝ下るものがあ 種の自叙傳の如きものであり、 日記と言はれるものであるが、質は普通の意味の日記でなく、一 本書は普通「感身學匠記」の名によって知られる興正菩薩叡尊の 又弟子門人の加筆及後篇の部分も

第二十四卷

第四號

八八三

られる。